

Contemporary Art Daily 2018年9月5日

ノナカヒルの角永和夫

アーティスト

:角永和夫

会場:ロサンゼルス・

ノナカヒル

展覧会タイトル:木

材/紙/竹/ガラス

会期:2018年7月

21日~9月8日

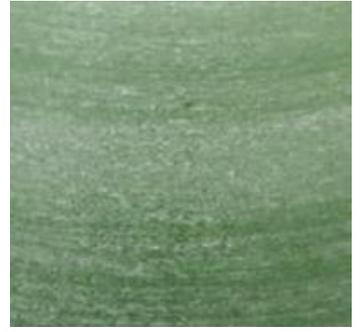
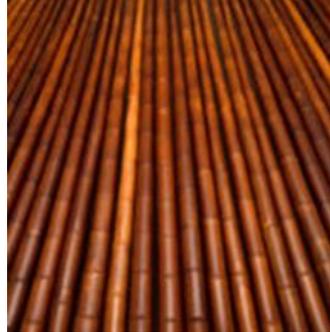
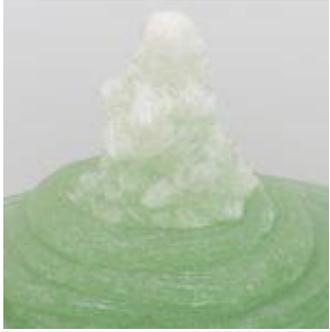


角永和夫、
作業工程:ガラス No.4、
1997、工程動画、9分2秒
画像の完全なギャラリー、
プレスリリース、ジャンプ
後に利用可能なリンク。



Images:





プレスリリース:

ノナカヒルは、1977年から1999年の間に木、紙、竹、ガラスなどの素材で制作された角永和夫の彫刻を発表します。

林業の子孫である角永は、1960年代後半に芸術家になることを選びました。彼は最初に絵を描いてみましたが、1970年頃、角永は自分の手の芸術的表現を避け、自分の選んだ素材が自分自身の表現主体になるプロセスを開発することにしました。彼の作品は、作品の最終的な形を決定する媒体の生来の特徴を明らかにしています。彼は、発展途上アーティストとして、アルテポベラ、もの派、プロセス・アートの作品に感銘を受けましたが、内部から材料を深く体系的に探究する実践を模索していました。

完全なギャラリーショーでは、1977年から角永が「Wood No. 8-D」を展示します。この杉の丸太は、12フィートの長さに沿って一定の間隔で穀物を横切ってストロークされ、アーティストのアクションとマテリアルの自然な反応の両方を明らかにします。ピアノの鍵盤に似たパターンのひび割れ。1984年の別の作品「Wood No. 5-CI」は、その13-1/2フィートの長さに沿ってベニヤスライスされ、結果として得られたウェーハの薄い平面がコアの元の位置に接着され、最外縁が反応するようになりました。刻々と変化する環境条件に。1983年のペーパーワーク「Paper 1-BF」は、

3,000枚以上の手作り和紙を重ね、製紙工程で濡れた状態で重ねています。積み重ねられたシートは、一端で極度の重さで圧縮されたが、他端では、シートが剥がされて、紙繊維を風乾させた。結果として生じる純粋な紙の作品は、対照的な2つの自己説明的な状態で存在します。角永はまた、注がれたガラスの2つの作品を示しています。これは、13年以上にわたる研究開発の成果です。これらの印象的なオブジェクトは、溶かされた通常の板ガラスの細い流れによって形成され、高さ10フィートから48時間、カスタマイズされたアニーリングオープンに連続的に注がれます。決まった形。1999年の「ガラス No. 4-I」の重量は1,900ポンド(846kg)で、1999年の「ガラス No. 4-L」の重量は1,477ポンド(670kg)です。1984年からの「竹 No. 1-B」も表示されます。垂直平面として提示されるこの作品は、ゆっくりと窯で乾燥された50本の若い緑の竹の茎で構成されており、素材の天然色素。これらの各作品では、アーティストは工業的に生産された天然素材を工業技術とともに持ち込み、結果として生じるフォームが素材の本来の可能性の純粋な表現を伝えるように設計されています。「植物や動物など、すべての生物には魂があります。私の芸術は魂を明らかにしています。」-角永和夫

角永和夫は1946年日本生まれ。石川県在住。

著作権 2008 — 2020 Contemporary Art Daily